



日動労千葉

国鉄千葉動力車労働組合

〒280 千葉市要町2番8号(動力車会館)

電話 (鉄電) 千葉 2935・2936 番
(公) 千葉 (22) 7207 番

91.12.3 No. 3505

中野委員長。労働講座(11.30)で

二波のストを高らかに総括

一月三〇日割労働者福祉センターにおいて、動労千葉労働学校第Ⅵ期第一回講座が、四〇名の組合員・家族会の参加のもとに開催された。

講師は、元朝日新聞労働記者、現国労顧問の村上寛治さんで、今回と次回(二回)にわけて「労働運動史から学ぶ―戦後労働運動の軌跡」をテーマに行われた。

そのあと、中野委員長より、この間の二波のストライキの総括提起をうけ、全参加者が確信をもって、九二年への決意を固めてきた。

JR東鉄労の 東切り母結を粉碎と 二波のストライキ

―三つの意義

中野委員長は、今回のストライキは今までと「一味」ちがうストライキとしてうち抜かれたことを実感をこめて提起された。

その中で、中野委員長は、

それは何よりもJR東労組を巻きこみJR東労組、とりわけ東京からのスト破りを粉碎し、運転職場の労働者に大きな流動をつくりだしたこと。

結局東労組は、われわれのストライキの、徹の中で、一方的な裏切り妥結がでさず、しかも広範に「一・二九動労千葉第三波スト」説が流されたように、動労千葉のストライキが状況を大きく左右してきたことをがっちり確信できる。

そのうえで、この二波のストライキの目的と意義を三つの点にわたって明らかにした。

その第一は、なによりも反合・運転保安―動乗動反対としての闘いであった。しかもこの闘いは、乗務員だけではなく、JR東日本五万人体制の中で、鉄道と関連事業収入を一對一にするという大攻撃のはじまりに対する先制的闘いとしてうちぬかれたことである。その中心をなす動乗動改悪はなんとしても許せないことだ。

第二に、今日のJR体制の中に風穴をあけたことだ。運転士は分割・民営化の前から半分へっついている。なのに乗務キロは以前と変わらない。こうした背景には、JR当局とJR

R総連革マルによる一体となったJR体制がある。それが西・東海・九州とおかしくなっている。それは東日本や貨物にも必ず波及する。今こそJR体制をうち破る絶好のチャンスが到来した。われわれの闘いが、そうした情勢をきり拓いてきたといっても過言ではない。

第三に、この闘争が、九二年の諸闘争の助走になったということだ。九二年はこれまで以上の激動の時代をむかえる。

一言で言えば何がおきてもおかしくないというところ。この中で労働者・労働組合として、



11.30 労働講座。労働者福祉センター(組合員・家族会40名が参加。)

どう闘っていくのかをさし示し、来年三月のダイ改を、そのための決定的節目として、うかびあがらせたことである。

以上の三つの意義を全体のものとして、スト体制を更に整え、強化し闘いぬこう。

以上の委員長の提起を全員が拍手で確認した。

・元朝日新聞労働記者、
・現国労顧問、
村上寛治氏の講演

労働者の
生きざまを不敗



長い闘いの歴史と豊かな体験をもつ村上氏の講演は、持ち時間二時間四〇分の間、講演にくぎづけにされるといふ意義あるものであった。

今回は記者として、氏が戦争に徴兵された過去と、それへの総括からはじまり、戦後は終始、労働者・民衆の側に立って活躍されてきた経緯が述べられた。

村上氏は「その歩みが唯一の財産です」ときっぱり語られ、われわれ労働者が、どのような立場に立ち、どう生きるべきかを示された。次回の講演は高度成長期以降の労働運動の流れについて語っていただく予定です。

乞う、御期待!